地域施設計画研究41 2023年7月 日本建築学会
建築計画委員会　施設計画運営委員会　地域施設計画小委員会
Regional Community Facilities Planning and Design, AIJ, Vol.40, Jul., 2022

本と暮らしのあるところ　だいかい文庫

まちの人が一箱本棚オーナーとなる小さな図書館と居場所，そして健康相談の融合

DAIKAI BUNKO

A place where people in the community can consult about their health and a small library with a system that allows city residents to become owners of "one box bookshelf" have merged.

○村川真紀＊1
MURAKAWA Maki

In Toyooka City, “Daikai Bunko” is a small, multifunctional place with medical welfare at its core. It functions as a community library, bookstore, cafe, and consultation counter, where people can have a talk about solitude or their health. It was opened in December 2020 by Mr. Morimoto, a general physician in a hospital in Toyooka City. People can use it not just as a bookstore or library but also to consult someone about their life and health concerns. "Daikai Bunko" builds new relations among people.

Keywords : The Community-based Integrated Care, local community, health consultation, A safe place, Community place
地域包括ケア，地域密着型コミュニティ，健康相談，居場所，コミュニティ拠点

1．施設概要

「本と暮らしのあるところ だいかい文庫」は豊岡市にある，まちのシェア型図書館・書店／カフェ／居場所や孤独，健康にまつわる相談窓口などの機能をもつ，医療福祉を核にした小規模多機能な場である。豊岡市の病院で総合診療医として勤める守本陽一氏により 2020 年 12 月に開設され，運営されている。以下は，2022 年 3 月 29 日に守本氏にヒアリングした内容並びに，公開されている関連情報を元に記述する。

■基本情報

名称：本と暮らしのあるところ　だいかい文庫
所在地：〒 668-0033 兵庫県豊岡市中央町 6 － 1
運営事業者：一般社団法人 ケアと暮らしの編集社
設計・リノベーションデザイン・施工：合同会社 流動商店（三文字昌也氏，豊田健氏）
敷地面積：－
延べ面積：30 ㎡程度（3 階建のうち，1 階店舗部分のリノベーション）
構造：鉄骨造
運営開始日：2020 年 12 月 5 日
開所時間：店番の方がいる時間（Web のカレンダーで店番が掲載されている日にオープンしている）

2．運営概要

2．1 活動の背景

守本氏は，地域包括ケアシステムや地域共生社会[1)]，社会的処方[2)] など地域を中心とした医療福祉政策が展開・推進されている医療政策の社会的背景もあり，医師として，入院から退院までのスポットで関わるケアでなく，日常の中での予防や健康，退院後の生活支援など，より生活に根差した面的なケアを地域に届けたいと考えて活動を始めた。また，地方で課題となっている空き家問題や，都市のスポンジ化[3)] への対策として，地域への小規模多機能な場の醸成が解決策の一つになると考えており，特に医療福祉関係の人がその小規模多機

＊1　東京電機大学未来科学部建築学科　研究員
*1 Researcher, Dept. of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

能な場づくりを行うことでマイノリティを含む様々な人が抱える多様な課題を解決する糸口が地域内にできていくと考えて活動を展開している[4,5]。

2.2　活動フィールドとだいかい文庫に至るまで

活動の場は守本氏の出身地の隣街である豊岡市である。豊岡市はこうのとりの野生復帰や城崎温泉が有名で，近年では演劇の街としてアーティスト・イン・レジデンス[6]の設立などに力をいれている。医療･福祉の面では，ドクターヘリの出動件数全国1位や在宅見取り率が高いなどの特徴を持つ。東京都と同じ面積に人口8万人という，過疎化・高齢化が進む地域である。

守本氏の活動は2015年の地域診断[7]にはじまり，2016年から「YATAI CAFE[8]」と称し，コーヒー屋台をひいて医療などの専門職者が地域に赴き，地域の方とコーヒーを飲みながら，医療や健康について考えて対話する場づくりを行っていた。活動を続ける中で，「YATAI CAFE」を媒介とした地域の多様なコミュニティによる多層的なネットワークが生成され，地域住民がそのネットワークを利用して他者やコミュニティと繋がっていく仕組みが構築された。ほかにも映画館を利用した終活に関するイベント，花見会などを実施しており，「YATAI CAFE」は地域資源を見つける場や地域住民の居場所・交流の場といった多様な役割をもち，社会的処方の場づくりとしても機能していた。

「YATAI CAFE」を4，5年程続ける中で，リピーターとなる利用者も増加し，「日常の中で医療や健康についての相談もできる場」への認知が地域に広まった。また，運営するメンバー内では，地域に医療者が赴く，所謂「行く」活動だけではなく，地域にあり続ける，固有の場での継続的な活動も必要と考えられていた背景もあり，だいかい文庫の設立に至った。

3．コンセプト

「本のある場」と「ケアのある場」をコンセプトとしており，「本と暮らしのあるところ」とある通り，あくまで「シェア型図書館／書店」を基本機能としている。これに併せて，悩みの共有や孤独，居場所，健康にまつわる相談ができる「居場所の相談所」も持つという展開をしている。

保健・医療の専門相談窓口にかかることに抵抗がある（相談するほどのことではないと考えているが悩みを抱えている，またはそもそも専門の相談窓口への心理的ハードルが高い）人や，自身は健康で保健や医療はあまり自分には関係がないと思っている人，暮らしの中に悩みや不安を抱えている人などにこそ，日常の中に根差した気軽に相談できる場やケアの場の存在とその認知が重要とされる。しかしこれらの層に対し，名称や広報で医療や保健を前面に出したアプローチでは利用に繋がらなかったという守本氏の過去の活動での経験，また，行動経済学の「ナッジ理論」を取り込んで成功した「YATAI CAFE」での活動から，まずは「楽しそう」や「おしゃれ」といった直感に働きかけ，訪れてみたい，利用してみたいと思える機能や名称を設定している。

■機能

機能の設定では，守本氏本人が本好きであることや，地域の書店の少なさ，特に医療福祉系，人文系，社会学系などの学術書関連の書籍を扱う書店がなかった点から，本を媒介とした場を考えていた。いくつかの事例

豊岡市航空写真（デジタルオルソ）レベル1000，H29年撮影
出典：豊岡市オープンデータサイト，https://odcs.bodik.jp/282090/

Google map　©2022 CNES/Airbus,Maxar Technologies,Planet.com

図1　立地周辺（上：豊岡市オープンデータサイト，下：Google map から引用）

豊岡駅前から続く大開通りの商店街を東に徒歩10分ほどの場所に「だいかい文庫」はある。駅からは少し離れているが，周辺にはカフェをはじめとする飲食店が多くあり，カバンストリートも近い。

を視察し「みんなの図書館さんかく」などを参考に，図書館機能を中心とする書店とした。

■名称

名称では，医療を連想させる名称を用いず，図書館／書店を想起させる名称を掲げている。地域に居場所を提供し，健康などの相談を受ける活動には「暮らしの保健室」などがある。しかし，「保健室」の名が想起させる医療や保健の場といったイメージは，利用者がそこに積極的な関心を持っていなければ利用に至らないという課題がある。だいかい文庫では，コンテンツの充実により医療や保健とは別のテーマによる繋がりの醸成を意図して，中心機能である図書館／書店に沿った名称とした。

■「中距離」コミュニケーションのデザイン

名称・機能共に「コミュニティスペース」という意図は強く含めていない。コミュニティスペースという名称・機能の提示をしないことで，他者とのコミュニケーションを苦手と感じている人でも利用しやすい場としている。本を見る，借りる，買うなどの単独での利用が可能な場とすることで「店頭でよく顔を合わせる」程度の距離感＝「中距離」なコミュニケーション構築ができるよう考慮している。一方で，後述の店番など店舗にいるスタッフは来訪者や滞在者への関わり方の心得として，常連や内輪で盛り上がるような雰囲気が固定化しすぎないよう，会話などその場のコミュニティ環から最も遠くにいる人に配慮している。

4．運営面での特徴

先述の「暮らしの保健室」をはじめとする地域の居場所は，運営面の多くでボランティアが活動し，人的・金銭的リソースを担保している。参画のしやすさなどはメリットとして挙げられるが，場の継続的な確保といった面では課題もある。だいかい文庫では，継続的な場を確保する仕組みの一端として，「一箱本棚オーナー」システムがある。月額 2400 円で本棚の一区画を貸し出し，借主は一箱本棚オーナーとして借りたスペースに書籍の展示や貸出や店番として運用に携われる仕組みで，見学時の時点で 70 名程度が登録している。オーナーである登録者は近隣住民から理念に賛同して参画した近隣県の方など，比較的遠方まで広範囲に及ぶ。アートセンターや社会福祉協議会，市役所の職員，学校の教員，商店街の人，映画館のスタッフなど，「YATAI CAFE」で

写真 1　外観

全面ガラス張りのため，前を通りかがると内部の壁を埋める本棚の様子が良く見える。ダークブラウンの木目やサッシと内部の照明がおしゃれで落ち着いた雰囲気を醸し出していながら，ガラスへの手書きの掲示により親しみやすさもある。

の繋がりから参画している人もいる。この仕組みにより一定の収入を確保し，店番や専門職への給与，家賃などの運営資金に充てている。

守本氏は，本務では総合診療医として勤務しており，だいかい文庫での活動は本務とは完全に切り離している。一般社団法人を立ち上げての運用も，医師業との切り分けを明確にして活動しやすくするためである。

■関わり方にグラデーションをもたせる

訪れた人の関わり方として「①訪れる②図書館を利用する／本を買う③店番の人に話しかける／顔見知りの利用者と話す④一箱本棚オーナーになる⑤店番をする」のように居場所～役割まで，関わり方の深度にグラデーションを持たせている点が特徴であり，利用者は各自，自身の状況にあわせて関わり方の深度を行き来させている。

■居場所の相談所

第２第４土曜日の 13 時～ 15 時、第２第４火曜日の 21 時半～ 22 時に居場所や孤独，健康にまつわる相談を受け付けている。4，5 回利用者として訪れた後に，相談に至るケースもある。

■携わっている専門職のスタッフ

医師（守本氏），看護師，理学療法士の３名で対応している。

■広報活動

基本は SNS がメイン。地方であっても，SNS などで 50 ～ 60 代までの幅広い層にリーチできている。また，広告ではなく，広報として新聞などの地元メディアや社協便りへの掲載，親近感がわくような手書きのお便りを地域のお店においてもらうなどの活動を行っている。SNS は Facebook/Twitter/Instagram とすべて実施して

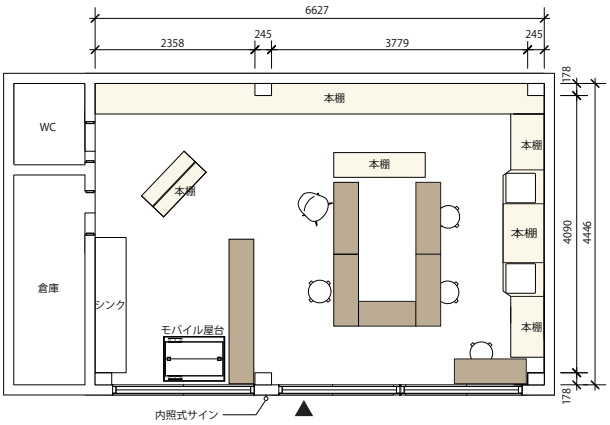

図２　図面

写真２　貸出用本棚（左側正面）と販売用書籍の本棚（右側）
床から天井までフレームが組まれているが，程よく奥の壁が抜けて見えるため圧迫感は感じない。写真中央のロの字型に組まれたテーブルは合同会社流動商店によるデザインで，省スペースかつ取り回しのしやすい什器である。

いるが，Instagram で知る人が多い。

■書籍

書籍のセレクトは守本氏が行い，基本的には自身が読みたい本を仕入れて本棚に並べている。

■利用者層

多世代に渡る。以前調査した際は，30 代女性と 60 代男性の利用が多かった。リタイア後の男性，子育て期や子育て終わりで社会との接点が薄い人の利用が多い。相談については，若い人の利用がほとんどで，高齢な方は相談利用のハードルが高く，複数回利用する中で相談に至るケースが多い。また，現在は子連れの利用者が絵本を読むなどはあるが，小中学生が多く来る場ではない。こどもの利用に向けて駄菓子を置くなども考えたが，無理にごちゃまぜをつくっても，今利用している人にポジティブではないので，次に場を作る機会に取り入れようと考えている。

■インターン

主体的に場をつくれるような運営を心掛けている。オープン後半年ほどに，これまで一箱本棚オーナーのみであったお店番について，「インターン」としてお店番のみを行う人を募集した。毎月お店番として入ることを条件に，見学時時点で，登録者は 10 名ほど（うち，継続的に活動している方が 3 名）いる。だいかい文庫のような場作りを希望して参加する人もいるが，社会復帰の契機として利用したい人が多い。金銭授受による生産者としての立場を強く求められないあり方ができる，生産者と消費者の間として存在できる場・役割であり，このような役割への需要を通して，地域との接点の場が求められていると感じている。

5．建築概要

元は商店街のマッサージ店である。この物件に至るまでに，不動産からいくつか空き家の紹介を受けた。しかし，守本氏が総合診療医として働きながら進めるプロジェクトである特性上，民家などで家財が残置されている物件は準備段階の片付けなどの作業量が多いため不向きであり，元店舗である現物件は，商店街に面している点も含めて最適であった。

守本氏は，地域住民への周知や場所への理解を兼ねて，地域の人々やだいかい文庫への支援者などが参加できる，ワークショップ形式でのリノベーションを希望していた。このような，地域住民などの関係者が参加す

写真３　カフェ側

写真左側奥の三角屋根は「YATAI CAFE」で活躍しているコーヒー屋台。コロナウイルス禍の影響もあり休止していた時期もあったが，徐々に再開している。手前のカウンターは本の貸出や，コーヒー提供の場であり，コーヒー豆やグッズなども販売している。

るワークショップの企画・運営と改修の設計施工を総合的に行うプロジェクト進行を依頼できる建築士を探していたが，地域内では希望にかなう業者と出会うことは難しかったため，守本氏が東京（谷根千地域）で活動していた際の知人である合同会社 流動商店[9] に依頼した。空間の計画原案は守本氏であり，流動商店の三文字昌也氏，豊田健氏により一連のワークショップとリノベーションの企画・施工などが進められた[10]（図２）。

初期投資額はクラウドファンディング[11] により賄われている。ワークショップには，地域診断や「YATAI CAFE」活動時から関わりをもっていた住民も多く参加したほか，クラウドファンディングやメディア取材などによる広報から存在を知って参加した住民もいた。これまでの活動や各種メディアでの広報活動により，オープン時点で既に 30 名ほどの「一箱本棚オーナー」登録があったため，スムーズに運用を始められた。

６．立地・空間の特徴的な点

６．１　立地

だいかい文庫は，豊岡駅東口から円山川リバーサイドラインまで延びる大開通りにある商店街沿いに立地している（図１）。駅からは徒歩 10 分程度で，商店街の終わりに近い位置にある。駅に近く飲食店などの店舗が並ぶ賑わったエリアからはやや離れているが，大開通りと直交するカバンストリートからほど近く，近隣には豊岡劇場やカフェなどがあり（写真６），程よくにぎわいのあるエリアである。商店街駅近くの最も賑わいあるエリアからは適度に離れていることで，利用者は目的的に来訪し，その場にいる人が同一の目的で訪れることから，落ち着いた空間が醸成されている。

また，商店街はセミクローズドモールであり（写真４，写真５），利用者は天候を選ばずにアクセスできる。車訪問の場合も，大開通りから入庫できるコインパーキン

写真４　セミクローズドモールの商店街
見通しが良く，車道を挟むため，晴れた日には開放感がある。

写真５　通り向かいからだいかい文庫を臨む
左手側がだいかい文庫である。どの商店も間口を大きく開けたつくりであり，だいかい文庫のファサードも町並みによく調和している。写真では，訪問対応のため一時的にロールカーテンをおろしている。

写真６　通り向かいのカフェ
だいかい文庫の向かいにはカフェがあり，店内は賑わっている。だいかい文庫の敷地は，だいかい文庫のためだけに人々が訪れる場所ではなく，商店街とカバンストリートの間にあるこの立地に，程よく人の行き来があるとわかる。

写真７　入口のサイン
木の質感とレトロなランプ照明が印象的な入口サイン。

写真８　個性が覗く一箱本棚たち
原則書籍のみの展示としているが，相談次第で自分の趣味の一品の展示も可能。オーナーがお店番をしている時には，自身の本棚にある書籍の販売も可能である。展示方法や見せ方もオーナーそれぞれで，並んだ書籍や一品から人柄がにじむ。大型本も置ける，高さと奥行きにゆとりのあるフレームが自由さを生み出している。

グが点在しているため，先述の一箱本棚オーナーで遠方にいる方が店番で訪れる際などに交通手段を問わずにアクセスできる。

守本氏によると，立地選定にあたっては商店街に面していることが絶対条件であった。だいかい文庫に初めて訪れる地域の人にとっては，一見してわかりやすい活動ではないため，場所がわかりづらく隠れた所にあると「よくわからない場所でよくわからないことをやっている」と地域から不信感を招く要因になり，地域の異分子になってしまう。そのため場所は誰にとってもわかりやすい商店街に面することで，地域の人にとってこの場所の存在を受け入れやすくすると共に，訪問を受け入れる間口を広くとる意図があった（写真１，写真７）。

６．２　空間

■本棚

店内に入ると床から天井まで全面に本棚となるフレームが展開されている。入って正面が貸出を行う「一箱本棚」であり，右手側には販売書籍の本棚（写真２，写真 11），左手側にカフェ・受付カウンターがある（写

写真９　窓際の席
通りを眺めながら座れる。テーブルと椅子が一人分あり，時にはここで PC 作業なども行う。

写真 10　本棚の間の座れる場所

真３）。本棚フレームは高さや奥行き，幅にゆとりがあり，大型本も並べられるほか，二段にするなどオーナーが各自で立体的に工夫を凝らして本を展示できる自由度がある。並んだ本の背表紙の向こう側には，板張りである壁の落ち着いた色調の木目が覗き，床から天井までが本で埋め尽くされていても圧迫感を感じさせない。また，一部では書籍に加えて趣味の展示場所としても使われており，壁面の本棚には各オーナーの個性が覗く（写真８）。このように，壁面の本棚は，地域のステークホルダーである地域住民の名刺・自己紹介代わりの集積の場であり，個人の趣味や興味について，本を媒介に知ってつながることができる，物理的に見える「ハブ」の役割を果たしている（写真 14 ～ 16）。

■滞在の場所

滞在の場所は中央のテーブルや椅子，窓際，本棚の間などがある。PC 作業などをする人は窓側のカウンター席を利用することが多い（写真９）。また，本棚には一部座れるような仕掛けがされており（写真 10），本棚に埋まるような，囲われ感のある中でゆっくりと滞在できる。「YATAI CAFE」で利用するコーヒー屋台が店内にあり，利用者は豆やコーヒーを購入できる。購入したコーヒーを飲みながらの読書も可能である。

■居場所の相談所

入口のガラス戸には，相談受付が可能な医療系専門職がお店番をする日も含めた週間のスケジュールが書かれている（写真 12）。また，書店・図書館の利用者向けに店内にも居場所の相談所の案内があり，相談以外の利用や通りすがりの際などにさりげなく目に入るようにしている（写真 13）。居場所の相談所として設定している時間に訪問する人に対し，一人が良い場合はブラ

写真 11　守本氏の選書による販売用書籍
販売用書籍にはグラシン紙がかけられており，手に取って読んで，気に入ればそのまま購入できる。

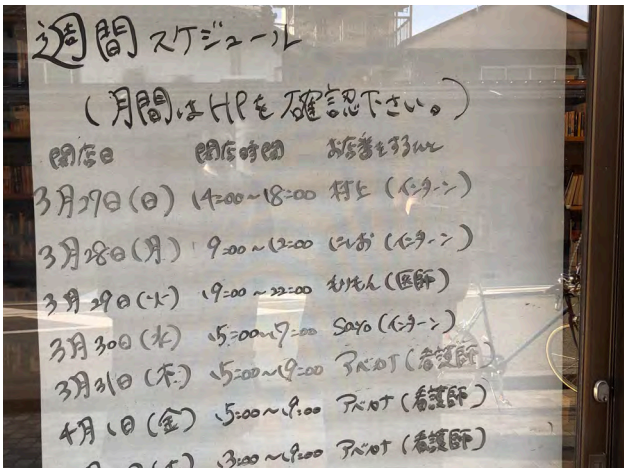

写真 12　通りすがりでも見れる週間スケジュール
月間のオープン状況の情報はホームページにあるカレンダーで確認できる。週間スケジュールを通りすがりでも見れるように掲示しており，誰がいつお店番をしているかがわかる。これにより，利用のための情報取得の選択肢を増やすとともにハードルを下げる役割を担っている。

写真 13　ケア相談についての掲示
open-close 札の裏に記載されており，出入りの際にさりげなく目に入るように配慮されている。図書館・書店として利用する人々も，日常利用の中で情報に触れられるようになっている。

写真 14　本棚の様子
前後に本棚があるため，通りからの視線を程よく遮り，本に没入できる雰囲気がある。背後の本棚が，テーブルのあるスペースとの緩衝材となっている。

インドを下ろして適宜対応している。医療系専門職がお店番の時に相談に至る場合は，オープンな場で気軽に話をしている。

7．今後の展開に向けて

守本氏の今後の展開に向けた考えについて，ヒアリングをもとに以下に記す。

小さな拠点[12]づくりや地域共生社会，社会的処方のモデル事業など，縦割りで省庁ごとの政策があるが，総じて小さい場を各地域に作っていくことをうたっている。しかし，降りてきた先の市区町村レベルで地域づくりや都市計画と統合できていないことが課題である。本来であれば，地域包括ケアの頃から地域づくりなどとあわせて整備できればよかったが，医療福祉の範囲に留まってしまった。近年の地域共生社会や社会的処方箋に係る政策にあわせて，地域づくり・医療福祉の政策とリンクさせて持続的な形で各地域での事業や取り組みが展開できるとよいと考えている。

また，医療福祉の場は徐々に開きつつあるが，未だに［サービス提供者・受益者・それ以外］，［こども］や［高齢者］といった枠で扱われ，役割が固定化されている。そこにどうグラデーションのある場をつくっていくかが重要で，それぞれが居心地よいと感じる場があり，結果として，グラデーションやごちゃまぜが生じるものだと守本氏は考えている。利用者それぞれの居心地よい場の集合の結果としてのグラデーションある場づくりをしていきたいと考えている。また，今後は，地域内でのネッ

写真 15　感想カード
返却期限を記したカードには感想記入欄が設けられ，返却時に回収後，オーナーに届けられるほか，ファイルにまとめられており，閲覧ができる。オーナーと利用者，また利用者同士を繋ぐツールのひとつである。

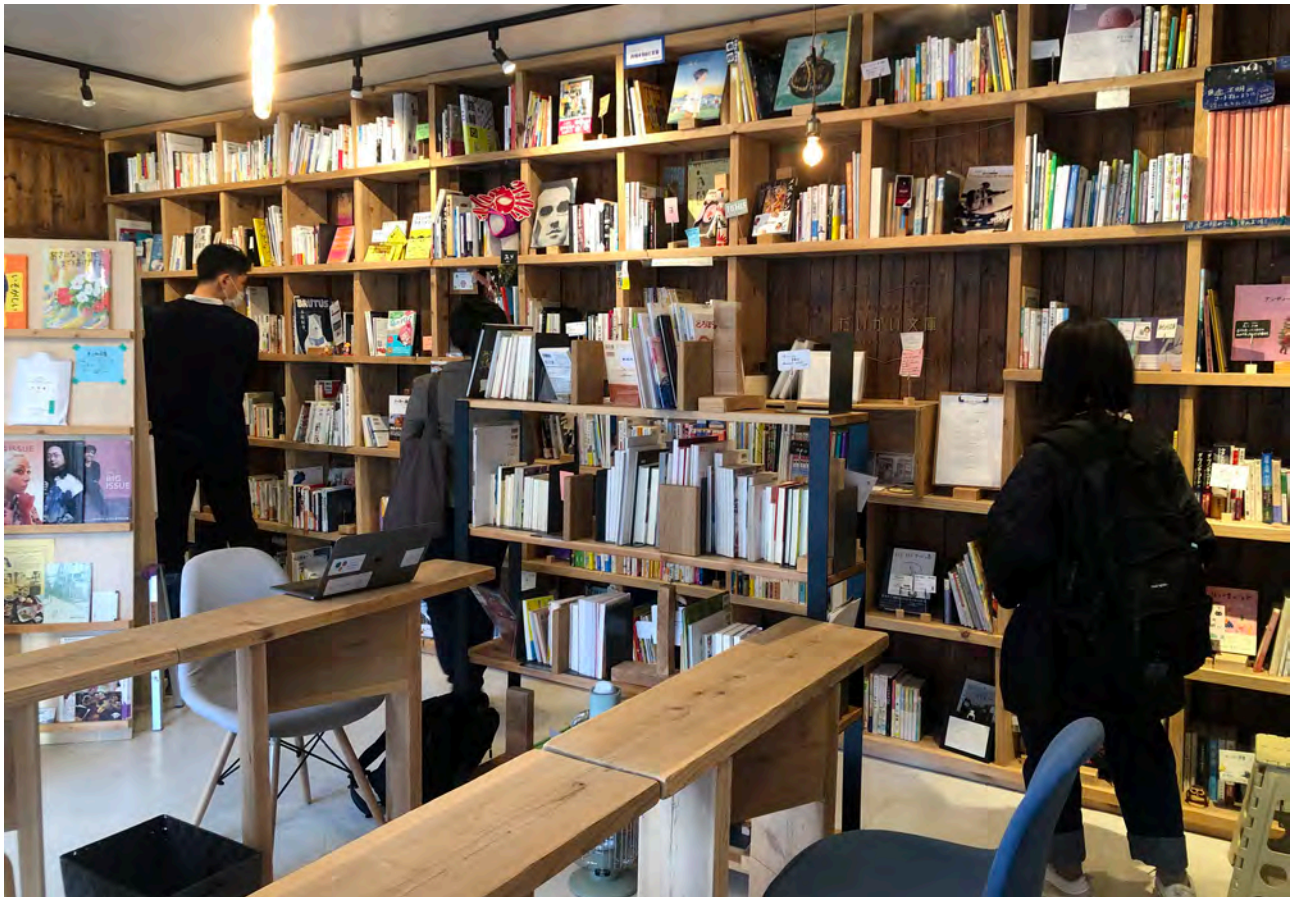

写真 16　貸出用本棚を臨む
本棚中央には，感想カードのファイルが置かれている。本棚全体が，オーナーである地域の人々の自己紹介展示場ともいえる。

トワーク化をさらに強固にしていきたいと考えており，地域の多様なスペースや共同体とつながりをもって，そのつながりに一歩踏み入れれば公的なサービスにも民間のコミュニティにもゆるやかに繋がれる仕組み，関係性を作っていくような活動展開を考えている。

８．まとめ・考察

本事例は，「本」を媒介に日々の生活の中で医療や他者，社会とゆるやかに繋がる場が提供されている。そして各利用者がその関係の濃淡を選択できるような仕組みがあり,「本」を共通項とした新たな地域コミュニティネットワークを構築している点が特徴的である。

「本」という興味や嗜好に基づいた共通項での繋がり，「図書館」という貸し借りや感想カードでのメッセージのやり取り，一箱本棚オーナーやお店番／インターンという，サービス提供／受給側を固定しない仕組みが，それぞれの人が持つ属性：［枠］を取り払った関係づくりを支えている。また，これらの仕組みやカフェ（飲み物の提供）の存在は，その「場」への関わり代の多様性や広さに寄与し，初回利用時のハードルの低さやリピート利用，生活の中での心配事や不安の相談しやすさにも繋がっている。

地域コミュニティを新たに構築する場づくりの計画では，上記の関わり代の多様さに加えて，目的的な来訪を促すための駅などの交通主要拠点からの距離，また一方で地域住民などに広く受け入れられる「わかりやすさ」のために，人通りがありつつも地域にオープンなエリア（本事例では商店街）への立地や，通りに面した部分を全て開口部とし，店内が通りから見通せる点が重要といえる。継続的な運用を支える仕組みでは，開設までのプロセスに地域住民だけでなく，地域外の関係者（プロジェクトの支援者など）を取り込んでいる点は，運営費の一部を賄う経済的な面での利点に留まらず，場の運営者の確保や地域の関係人口増加にも寄与していると考えられる。

７章でも指摘があるように，制度的な医療福祉連携や地域に開かれた医療や福祉の政策は進んでいるが，まちづくりとの足並みは揃っていない。老いる上で，その濃淡や時期の違いはあれど，必ず必要となる医療福祉への身近な窓口を自然に生活の営みの中に編み込む本事例は，地域に医療を開く好事例としてだけでなく，地域活性化やまちづくりの観点からも参考になる事例といえる。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に，篤く御礼申し上げます。なお，本研究は，科学研究費補助金（基盤Ｃ）「医療と介護の連携・地域包括ケアのもとでのウェルネス・コミュニティ拠点に関する研究（研究代表者：村川真紀）」の一環として行われました。

参考文献

１）公益社団法人日本生命済生会『地域福祉研究』編集委員会 監修，黒田研二 編著：地域包括支援体制のいま 保健・医療・福祉が進める地域づくり，ミネルヴァ書房，2020.12
２）西智弘 編著：社会的処方 - 孤立という病を地域のつながりで治す方法 -，株式会社学芸出版社，2020.2
３）饗庭伸：都市をたたむ 人口減少時代をデザインする都市計画，花伝社，2015.12
４）だいかい文庫 HP（https://carekura.com/daikaibunko）2022 年 4 月 2 日参照
５）note，医師が商店街の空き店舗に小さな図書館を作った理由。ケアをまわすエコシステム「だいかい文庫」とはなにか。（https://note.com/ymrmn/n/n36f8b0740800）2022 年 4 月 2 日参照
６）城崎国際アートセンター (KIAC) HP （http://kiac.jp/）2022 年 4 月 21 日参照
７）西智弘，守本陽一，藤岡聡子：ケアとまちづくり、ときどきアート，中外医学社
８）note，医療者が引く移動式屋台カフェの正体とは。YATAI CAFE が生み出す健康的な空間の理由。（https://note.com/ymrmn/n/n3ca817dcf1bd#IaBfe）2022 年 4 月 2 日参照
９）合同会社　流動商店 HP（https://ryudoshoten.tokyo/）2022 年 4 月 21 日参照
10）合同会社　流動商店 HP，本と暮らしのあるところ だいかい文庫 店舗デザイン・施工（https://ryudoshoten.tokyo/portfolio/%e3%81%a0%e3%81%84%e3%81%8b%e3%81%84%e6%96%87%e5%ba%ab/）2022 年 4 月 21 日参照
11）READY FOR HP，豊岡に社会的処方を実現する「シェアする図書館」を作りたい！（https://readyfor.jp/projects/47587）2022 年 4 月 21 日参照
12）内閣府，小さな拠点情報サイト（https://www.cao.go.jp/regional_management/index.html）2022 年 5 月 3 日参照